

(1) 1年の浪人生活

加藤が第一高等学校を卒業するのは1939(昭和14)年3月のことである。東京帝国大学医学部に入学するのが1940(昭和15)年4月。ここに1年間の空白がある。この1年について何も書いていないが、加藤は浪人生活を送ったのである。

第一高等学校時代に、加藤は文学に関心を寄せ、『校友会雑誌』の編集にかかわり、同誌や『向陵時報』に数多く寄稿した。そして文学部への進学を希望していた。ところが当時の加藤家の経済状態は、まったく流行らない開業医だった父信一の収入では、余裕がなかった。しかも、東京帝国大学といえども文学部卒業では、就職も当てにできない。将来の家計を心配した母織子は加藤の文学部進学に異を唱え、医学部進学を薦めた。一方、父信一は当時の花形だった工学部進学を勧めた。母織子の薦めに従って、加藤は文学部志望から医学部志望に切り替えた。友人山崎剛太郎は、加藤が文学部に進まないことに驚かされる。加藤は山崎に「文学は文学部に進まなくとも学べるからね」と答えたという。

しかし、文学部進学を希望していた加藤は、医学部進学のための勉強をまったくしていなかった。それでも合格するほど入学試験は甘くなく、東京帝国大学医学部の入学試験に失敗し、浪人生活を余儀なくされた。浪人生活に入っても、加藤は予備校には通わず自宅で勉強した。しかも、受験勉強に励むかたわら文学関係の読書も進め、浪人生活中に採られた『青春ノートVI』には「小林秀雄論」「立原道造論」「立原道造論覚書」を綴った。同人誌活動にも関与し、小島信夫らの主宰する『崖』や鈴木亨らの主宰する『山の樹』に寄稿した。同人誌活動に携わったのは、次の入学試験には合格する自信があり、かつ文学活動への情熱止み

がたかったからだろう。1940年4月には、首尾よく東京帝国大学医学部への合格を果たした。